慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アリストテレースの生涯と其の政治理論
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1934
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.28, No.9 (1934. 9) ,p.1319(1)- 1368(50)
JaLC DOI	10.14991/001.19340901-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19340901-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田評論

九月號

日吉建設資金募集趣旨書並寄附申込者氏名及金額

滿鮮旅行の收獲……井原紀

世界通信網と日本の地位……柏谷源藏

佛領印度支那印象記(三)……松本信廣

アメリカで日本文化史を敎へる……清岡暎一

辯論部夏期巡廻講演報告

塾報・雜報・各地三田會だより・圖書館記事・動靜・維持會報告

故伊藤秀一敎授遺兒敎育資金募集趣旨書・同應募者氏名

日吉建設資金拂込者氏名・鎌田先生傳記及全集刊行會報告

定價 金參拾錢
一年分 金參圓四拾四錢 振替貯金東京一八二〇四番

發行所 東京・芝・三田 慶應義塾

三田學會雜誌 第二十八卷 第九號

アリストテレースの生涯と其の政治理論

高橋誠一郎

一

千古の大哲學者アリストテレースは中層階級の出であり、而して其の政治的及び倫理的思辨に於いても亦、中層階級的であつた。然も爰に所謂「中層階級」は固より當時の希臘社會に於ける其れを指すものであつて、決して近世的意義に使用せらる可きではない。彼れは富裕なる醫師の子として生れ、有福なる學者的生涯を送り、而して最完全なる政治社會が中層階級の基礎の上に存し、又眞の德が中庸に在ることを說くものであつた。而して、彼れの學者的生涯に於いて、最も注意す可き二大事實の一は、彼れが二十箇年の長き日月をプラトーンの學園に送り、親しく其の薰陶を受け、爾後長く其の感化から脫却することを得なかつたことであり、他は彼れがマケドニア王及び其

の代理者の保護の下に、十三箇年に亘つて、雅典に居留し、其の學校を主宰せることである。プラトーンは彼れと異り、古き貴族の家門より出で、而して其の全生涯を通じて非民主主義的傳統に忠實なるものであつたと認められてゐる。又、マケドニア王室は、當時屢々社會革命の恐怖に襲はれた希臘諸市邦の土地的及び商業的貴族階級によつて、現存制度の闘士として仰ぎ迎へられたものであつた。是れ等の事實は又、此の中層階級的政治理論家の上に強く作用しなければならなかつた。吾人は彼れの生涯を稍や精細に考察して、其の個人的運命と時代的背景とが如何に其の政治學説の上に影響を及せるかを觀んと欲するものである。

二

アリストテレースは、西紀前三百九十二年よりも早からず、同三百八十五―四年よりも遲からざる交に於いて、ツラキア半島に於ける希臘人の小植民都市スタゲイロス（スタゲイラ）、即ち今のスタヴロに生れた。スタゲイロスはストリュモニコス灣に面し、山嶽重疊たるアトスの岬をハルキヂケに結ぶ地峽の少しく北に位して居つた。此の町は、西紀前六百五十六年にアンドロス島から渡つて來た希臘人によつて建設せられ、後、エウボエアの主要都市ハルキスの移住民によつて補充せられたものであつて、初めオルタゴリアと呼ばれた。同市は他の希臘都市と等しく別箇の自治團體であつたが、後に至つて、オリュントスを盟主とする自由都市聯合に加入せしめらるゝことゝ爲つた。アリストテレースが、雅典民主々義者の長く惱されて居つた自由病に罹ることを免るゝを得たのは、彼れがスタゲイロスの產であつたと云ふ事實に因る所が極めて多かつたと思はれる。小植民都市に生れた彼れは、スタゲイロスの市民たるよりも、寧ろ希臘の國民たることが出來た。彼れは、希臘にして國家的に結合するならば、そは世界を支配することが出來ると信じた。

アリストテレースの父ニコマッホス（Νικόμαχος）はスタゲイラの市民であつて、醫師として名聲高く、醫學上の諸書を著し、醫術の神若しくは「過誤なき醫師」と崇めらるゝアスクレーピオス（Ἀσκληπιός）の神雄的氏族から出でたことを誇りとしてゐた。其の母ファエスチスも亦、同市の良家の出であつて、ハルキスから來た最初の移民の血を引くものと傳へられてゐる。（Diogenes Laërtius, v. 10.）アリストテレースは、決してベルナイス（J. Bernays）等が彼れを呼ぶが如く、「半希臘人」（Halbgrieche）ではない。（總べての希臘植民地を半希臘と稱せざる限りは）。（Cf., Bernays, Die Dialoge des Aristoteles in ihrem Verhältnis zu seinen übrigen Werken, 1863, S. 2, 134.）。

アリストテレースの生れ〻時代には、スタゲイロス市はマケドニアの境界近くに存して居つて、同國王フィリッポスの父アミュンタス（Ἀμύντας）二世の居住して居つたペラからも遠くはなかつた。彼れの父ニコマッホスはアミュンタスの信任厚き侍醫として、又其の侶伴としてマケドニアの宮廷に其の時の多くを費した。アスクレーピアディ族は其の技術上の秘密を洩さゞることを誓約し、其の業を世襲し、一種のギルドを形成して居つた。アリストテレースが、其の幼少時代に於いて、醫術並びにマケドニア宮廷と深い關係を有して居つたことは、彼れの哲學をして著しく生物學的傾向を有せしめ、又、彼れをしてマケドニアの統率の下に於ける希臘合一の思想に慣れしむるに與つて力あるものであつた。

彼れは若くして其の父母を失ひ、アタルネオスに生れて、スタゲイロスに移住したプロクセノス（Προξενος）の監督を受くことゝ爲つた。エピクーロス（Ἐπίκουρος）及びヂマイオス（Τίμαιος）の述ぶる所に據れば、アリストテレースは初め放縱なる若者であつて、親から讓られた財産の大部分を浪費した後、軍務に從事したのであるが、幾許ならずして、之れに倦み、スタゲイロスに歸り、其の父の殘した外科用の建物、機器及び藥劑を利用して開業醫たらんと試みたと云ふことである。而も彼れは暫時にして復、之れを廢し、其の建物を鎖して、修辭學及び哲學に沒頭するに至つた。次いで彼れは雅典に赴き、プラトーンの學園に入門した。エウメーロス（Εὐμηλος）の傳ふる所が眞であるならば、彼れがプラトーンに就いて學ぶに至つたのは、西紀前三百六十二年、三十才の時であつたと云ふ。（Diogen. L., v. 6.）（エウメーロスは、アリストテレースの生誕を以つて、西紀前三百九十二年と做し、七十才にして歿したものと考へてゐる）。

然るに屢々後世の著者によつて引用せらるゝ傳記的大著 Βίοι の著者にして、卓越せるスミュルナの哲學者エルミッポス（Ἕρμιππος）の記述に源を發せる他の一說に據れば、アリストテレースが笈を負ふて雅典に遊學し、プラトーンの門下に其の名を連ねたのは、十七才若しくは十八才のことであつたと云ふ。此の說はアポロドロスによつて其の「年代記」（Chronica）中に採用せられ、而して「列傳體哲學史」（Φιλόσοφοι Βίοι）の著者ディオゲネス・ラエルティオス（Διογένης Λαέρτιος）及びハリカルナソスのディオニュシオス（Διονύσιος）の等しく踏襲する所と爲つた。アムモニオス（Ἀμμώνιος）に歸せられたアリストテレース傳並びにロッベ（Robbe）によつて一千八百六十一年、ライデンに於いて初めて刊行せられた作者不明の傳記は、アリストテレースを以つて十七才にして雅典に來遊し、三ケ年間屢々ソクラテースの社中を訪れ、（此の時はソクラテースが死んでから既に三十年以上を經過してゐる）、而して後、齡二十にしてプラトーンに就いて學んだものと做してゐる。ツェラー（Eduard Zeller）は、アリストテレースが暫時雅典の大修辭家イソクラテース（Ἰσοκράτης）の門下たりし可能性を認め、而して彼れがソクラテース門下であつたゝ云ふ風說を以つて、兩者の名の類似してゐる所から混同せられたに由るものと想像してゐる。（Die Philosophie der Griechen in ihrer geschichtlichen Entwicklung, Hrsg. von Wilhelm Nestle, 1919, II. Aristoteles und die alten Peripatetiker, S. 15.）。

アリストテレースのアカデメイア（Ἀκαδήμεια）入門を以つて十七才の頃と做す記述は、前述の如き軍務と醫術開業の計畫に費された期間に就いては何等傳ふる所がない。エルミッポスもアポロドロスも信賴す可き典據ではあるが、而も是れ等は西紀前二百二十年及び同百五十年頃のものであつて、共に、第一說の出所たるエピクーロス及びヂマイオスほど古いものではない。（George Grote, Aristotle, ed. Alexander Bain, and G. Croom Robertson, vol. I, 1872, p. 5.）。プラトーンは西紀前三百六十七年には、其の理想的國家を實現するが爲めに、又同六十一年には其の門下ディオン（Δίων）の件に關して、シュラクーサイのディオニュシオス二世を訪れたのであるから、三百六十七年から三百六十年に亙る期間に於いては、雅典に在ることが少なかつたものと看なければならぬ。果してエルミッポスによつて傳へらるゝが如く、アリストテレースの雅典遊學が、三百六十七年であるとするならば、其の後の

三四年間はプラトーンから連續的に教へを受けることが出來なかつたものと考ふ可きである。(ibid., pp. 5-6.)。

アリストテレースは、マケドニア王フィリッポスに宛てた書翰中に於いて、彼れはプラトーンと共に二十年を送つたと述べてゐると傳へられてゐる。(Vita Marciana, V. Aristotelis qui ferebantur librorum fragmenta, 1870, p. 427, i. 18. Rose; Ps. Ammon, ibid., p. 438, i. 13.)。彼れが果して三百六十八―七年、十七才の少年時代にプラトーンの學園に入つたものとすれば、彼れは四十才に垂んたる三百四十八―七年、即ちプラトーン死去の年までアカデメイアに止つて居つたことゝ爲る。既述の如く、アリストテレースの少年時代に於ける知識的教養は專ら醫學及び自然科學から來たものと觀なければならぬ。ソクラテースが雅典に於いて開始した哲學上に於ける革命―即ち當時の自然科學が渾沌たる混亂に過ぎざるものであつて、根柢のない獨斷と空虛なる思辨の集積であることを發見して、其の學徒の注意を這般の無益なる勞作から背向けて、其の全部を倫理及び政治哲學並びに人類に關する一切の事物に向はしやうとしたソクラテースの哲學上に於ける革命は未だアリストテレースを生んだ地方に於いては其の感化を認めることが出來なかつた。彼れの心知の自然的傾向は常に經驗的事實の研究に向つた。彼れは孜々として這般の事實を蒐集し、而して宇宙の百科全書的體系に之れを適合せしめた。然しながら、プラトーンの弟子として、又同僚としてアカデミアに在つて費した二十年間に於いて、彼れは一個のプラトーン主義者と爲つた。而して彼れの終生の事業は、プラトーン的思想の裝置を驅つて、觀察によつて明かならしめられた自然界を說明せんとする偉大なる努力であつた。(The Cambridge Ancient History, ed. J. B. Bury, S. A. Cook and F. E. Adcock, vol. vi, Macedon 401-301 B. C., 1927, pp. 332-333.)。

ヴェルナー・イェーガー(Werner Jaeger)は、アリストテレースは決して初めから冷徹なる批評的精神を以つてプラトーンの思想に迫つたものではなく、彼れの上に及ぼした其の偉大なる人間的全印象の重壓によつて長い年月の間呪縛せられて居つたと說いてゐる。(Jaeger, Aristoteles. Grundlegung einer Geschichte seiner Entwicklung, 1923, S. 10.)。イェーガーは又、アリストテレース及びプラトーンに對する其の關係を了解するが爲めには、全體としての「プラトーン」に關する漠然たる總念から出發することなく、之れに代ふるに彼れの最後の時代、即ち凡そ三百六十九年の頃に始まる抽象的な方法學的な時代に關する正確に限定せられた概念を以つてすることが大切であると做してゐる。アリストテレースは恰も重大なる變化が其の歩を進め出した際に、アカデメイアに入門したのである。斯くの如き時代に於けるアカデメイアの主潮は、彼れに明確なる方向を與へ、而して彼れの特殊の性向に適せる實り多き勞作の原野を開いた。ソクラテース的思想は常に現實生活に密接するものであり、而して初期のプラトーンは改革家であり、技術家であつた。之れと反對にアリストテレースの思想は抽象的であり、彼れの態度は純然たる科學者の其れであつた。然しながら、斯くの如き特色は唯り彼れに特有なるものではなかつた、是れ等のものは、彼れの屬して居つた時代を通じて、全アカデメイアに共同なるものであつた。(a. a. O., S. 13-14.)。プラトーンは其の晩年に於いては元素物理學に沒頭して居つた。他の現象に對する彼れの興味は僅かに醫學の範圍と倫理學及び政治學の其れとに存して居つた。後者に於いては、彼れは特に「法律篇」の爲めに、刑法及び文明史に關する廣汎なる

資料を蒐集した。斯くて彼れが細目の研究に向つたのは、アリストテレースが其の學園の一員であつた期間を通じてゞあつた。アリストテレースの思辨はプラトーンの「國家篇」並びに其の中に現るゝが如きイデア學說と連結せらるゝことを得ざるものであるが、而もプラトーン晚年のアカデメイアに於ける新たなる歷史的及び政治的資料の巨大なる蒐集がアリストテレースに與へた刺激は、前者の「法律篇」と後者の「政治學」との間に存する幾多の一致によつて明かである。(a. a. O., S. 19.)。洵に吾人は對峙と論難との奧に、アリストテレースの政治的理想とプラトーンの第二位の良國との間に存する密接なる根本的類似を認めなければならぬ。前者は後者の靑ざめた模寫であるとすら稱せられてゐる。

三

凡そ前項所述の如き推定は之れを是認し得るのであるが、然しながら、アリストテレースの思想發達の跡を嚴密に探求するは不可能である。彼れは、アカデメイアに於いて、對話篇の形態を以つて幾多の著述を行つたのであるが、是れ等のものは僅かに其の斷片が殘存して居るに過ぎない。彼れの蒐集した資料も殆んど全部失はれて了つた。今日に傳存する著作は主として彼れの學園の爲めにものせられたものであつて、プルータルホスの記す所が正しいとすれば、西紀前八十年の頃に在世して居つた逍遙學派の哲學者ロドスのアンドロニーコス(Ἀνδρόνικος)によつて公表せらるゝまでは、學園の外には殆んど知られてゐなかつた。(Ploutarchos, Sulla, xxvi.)。「地誌」(Γεωγραφικά)の著者ストラボン(Στράβων)の記する所に據れば、アリストテレースは其の死に臨み、自己の著作を其の愛弟子テオフラストス(Θεόφραστος)に委託し、テオフラストスは又、其の遺言によつて其の藏書の全部を其の友人にして學徒たるネレウス(Νηλεύς)に殘し、ネレウスは之れを其の出生の地、トロアスのスケプシスに搬んだ。ネレウスの死後、其の後繼者等は無學の人々であつて、單に此の大蒐集の貨幣價値のみを考へて居つた。而して彼れ等は、當時アレクサンドリアの圖書館を凌駕するが爲めにあらゆる手段を盡して其の新たに建設せる圖書館を充實せしめつゝあつたペルガモン王室の有に歸せんことを惧れて、アリストテレース等の書を地下窖中に隱匿した。是れ等の書は此の洞窟中に百三十年餘も埋藏せられて、蠹魚と濕氣とによつて甚しく損傷せられて居つたが、終に小亞細亞のテオスに生れた富裕なる愛書家アペルリコン(Ἀπελλικῶν)によつて凡そ西紀前一百年の頃に發見せられ、高價を以つてネレウスの後繼者等から買ひ取られた。アペルリコンの希望は是れ等のものを適當なる順序に排列し、保存の惡かつたが爲めに生じた多數の闕文を補充するに在つた。然しながら、彼れは哲學者であるよりも寧ろ愛書家であつたが爲めに、此の困難なる事業に處して良く其の責任を果すことが出來ず、瑕疵を以つて滿されたアリストテレースの著作集を公表した。其の後、アペルリコンの書庫は彼れの死後、雅典の占領(西紀前八十六年)と共に、分捕品の一部としてスラ(Lucius Cornelius Sulla)の手に歸して、羅馬に輸致せられた。而して、西紀前七十二年ルクルス(L. Licinius Lucullus)の爲めに捕虜と爲り、羅馬に拉致せられ、ムレーナ(Lucius Murena)によつて解放せられたポントスのアミーソス生れの希臘文法家チュランニオン(Τυραννίων)が此の書庫の整理に從事することゝ爲つた。無殘なる取扱を受けた主文に對してチュランニオンの行つた注意周到なる校訂は、實に西紀前第一世紀の中

葉に於いてアンドロニーコスの手に、其の主題に從つて類集せられたアリストテレース及びテオフラストスの著作の最初の完全なる騰本の基礎を成すものである。（Strabo, XIII. i. § 54.）。

リッター（Ritter）は、斯くの如く極めて浪漫的な物語を以つて、アンドロニーコスによつて編輯せられたアリストテレースの書を推稱するが爲めに生じたものと做し、恐らくは之れと其の長短を比較せられ得る他の編纂本が存して居つたであらうと思惟してゐる。固より此の有名な物語は文字通りに信ずることの出來ぬものであるが、而もアンドロニーコスによつて公にせられたものが、是れ迄知らるゝことのなかつたか、若しくは公表せらるゝことのなかつたアリストテレースの多數正眞の著作を含有するものであることは事實であらう。然しながら、アペルリコン文庫の眞體に就いて考ふるの時、其の中には又、正銘ならざるものをも包含するの虞れなしとしない。此の文庫中には、獨りアリストテレースのみならず、テオフラストス及び其の他の人々の著が幾多存してゐた。斯くの如き徑路を經て、而して恐らくは又他の徑路を經て、吾人に傳つてゐる異種的な多數寫本の中から、眞にアリストテレースによつて述作せられたものを、彼れの其れと同一の題目に就き、同一の表題を以つて述べた他の著者の作から區別するが爲めには甚だ大なる批評的識別力と愼重なる態度とを必要とする。彼れの著作の或る部分は幾分摘要の形態に於いて淨書せられた講義から成り、他の部分は、アリストテレース自身により、若しくは彼れの死後に於いて其の弟子によつて蒐集せられた種々なる年代の論文の編纂たる觀がある。批判的眼光に依つて是れ等の著述が如何なる順序に於いて成立したかを明かにすることが出來た後に於いて、アリストテレースの思想發達史は初めて能く構成せらるゝを得可きである。曩きに掲げたヴェルナー・イェーガーの著 Aristoteles, Grundlegung einer Geschichte seiner Entwicklung, 1923. は失はれたる著作の斷片により、又更らに重要なる論篇の分析を通じて、是れ等のものゝ根柢に於いて發達過程の存することを示すを以つて其の主要なる目的とするものである。彼れの著は是れより以前に著されたアリストテレース傳を驅逐して之れに代るものであつて、アリストテレース研究は彼れによつて多大なる進歩を見ることが出來た。而してディロッフ（Dyroff）及びカイル（A. Kail）等の諸學者も亦、同一の針路を辿りつゝあるのであるが、而も其の成果の或るものは猶ほ係爭中のものであつて、意見の一致を得るに至る迄には長き論爭を期待せられ得るのである。（Camb. Anc. Hist., op. cit., p. 333.）。

四

アカデメイア時代のアリストテレースが其の師プラトーンに對する關係に就いては、幾多の物語が行はれてゐた。アリストテレースはプラトーンの度重なれる不在を利用して、學園内に於ける自己の壓倒的勢力を確保せんと努め、是れが爲めにプラトーンは彼れを以つて忘恩の徒と做し、之れを其の母を蹴飛ばす仔馬に譬へたと云ふが如きは其の一例である。（Diogen. L., v. 2.）。然しながら、嚴密に檢討すれば、這般の物語が單なるヨタ話に過ぎざることが明かとなるであらう。彼れが其の偉大なる恩師に對して深甚なる敬意を表し、人格的に之れに傾倒して居つたことは、彼れがプラトーンの死に至るまで二十年間アカデメイアに滯留して居つたと云ふ簡單なる事實に據つても立證し得られると思ふ。又、未だプラトーン學園の若き學徒であつたアリストテレースを攻擊せるイソクラテースの學徒ケ

フィソドロス（Κηφισόδωρος）は其の師がアリストテレースの批評を受けたるに激し、アリストテレースを傷くるの目的を以つてプラトーンを攻撃した。是れに由つて、彼れが此の當時は單にプラトーン學園の一員と看做され、少くとも學園外の者は兩者間の不和に就いて何事をも知らなかつたものと觀なければならぬ。ケフィソドロスの手に成つた四編より成る大論難書はアカデメイアとイソクラテース學派との對抗の產物であつて、アリストテレースがプラトーン學園に修辭學の研究を導入し、是れに由つて是れまで潛伏して居つた兩學園間の拮抗をして俄かに公然のものたらしめた時代に屬するものである。カイザリアのエウセビオス（Εὐσέβιος）はヌーメニオス（Νουμήνιος）を典據として曰く、「此のケフィソドロスは其の攻撃しつゝある人（即ちアリストテレース）に對して論難せずして、却つて彼れが攻撃せんと欲しなかつた或る者（即ちプラトーン）に對して論難した」と。（Eusebius Pamphili, Praeparatio Evangelica, XIV. 6.）。

アリストテレースがアカデメイアに於いて草した對話篇はプラトーンの其れと等しく有識大衆を目的として著はされたものであつて、其の或るものは其の外形に於いて、又內容に於いて、共にプラトーンの中期の著作を模型として書かれた觀がある。他の或るものに於いては劇的描寫法は廢止せられて、座長によつて提出せられた或る題目に就いて連續的談論が行はれ、最後に座長が之れを概括する、後にキケロによつて使用せられた新形態が現れた。「エウデーモス、一名靈魂論」（Εὔδημος ἢ περὶ Ψυχῆς）に於ける不死の論述は、プラトーンの「ファイドン」（Φαίδων）中に表明せられた生死の概念を再現せしめてゐる。其の鄕土キュプロスから追放せられたプラトーンの弟子であり、アリストテレースの友人であつたエウデーモスはテッサリアを旅行しつゝあつた際に重患に罹つて、フェライ市の病床に呻吟して居つた。同市の醫師等が匙を投げた時、彼れの夢に美しい若人が現れて、彼れは間もなく全快す可きこと、其の後幾許ならずしてフェライの僭主アレクサンドロス（Ἀλέξανδρος）は其の死に逢着す可きこと、而して又、五個年を經過せる時、エウデーモスは其の鄕國に歸る可きことを彼れに約した。第一及び第二の預言は速かに事實と爲つて現れ、エウデーモスは其の健康を回復し、而して其の後幾許ならずして僭主は其の妻の兄弟等によつて、三百五十九年に暗殺せられた。而も是れ等のものに比して、此の亡命者に取り、更らに一層熱烈であつたものは、五個年にして第三の契約が履行せられ、鄕國キュプロスに歸還せんとする希望であつた。當時シュラクーサイから追放せられて雅典に滯在してゐた前記ディオンはアカデメイアの援護を受け、義勇決死の一隊を集め、僭主ディオニュシオス二世を驅逐して、其の都市を釋放するが爲めに是れ等の人々の生命を賭せんと覺悟を極めた。プラトーンは彼れの企圖を阻止したのであるが、ディオンが實現せんとしつゝあるものと想像せられたプラトーンの政治的理想に對する熱心に驅られて、若き哲學者の或る者は遠征に加つた。是れ等の人々の中にエウデーモスが居つた。而も彼れはシュラクーサイ市外に於ける交戰に殪れた、それは恰度三百五十四年のことであつて、夢の告げがあつてから、正確に五個年を經過せる時であつた。斯くの如き思ひも掛けぬ夢想の實現は、アカデメイアに於いては、神の預言した所のものは、靈魂の現世的鄕土への歸還ではなくして、其の永遠の鄕土への其れを意味するものと解釋せられた。アリストテレースは、其の對話篇「エウデーモス」に於いて、彼れの最愛の友人の思出を無窮に傳へん

としたのである。彼れは神自身が其の約束の履行によつて靈魂の天上的起原及び其の未來に於ける天上への復歸に關するプラトーン學說の眞理を確證せることを示すが爲めに、先づエウデーモスの夢想の物語を述べたのである。(Jaeger, a. a. O., S. 37-8.)。此の時代に於いては、アリストテレースは靈魂を以つて肉體の物質から分離し得ざる一形態と看做さずして、之れを實體と觀じ、而して猶ほ未だイデア學說を遵奉して居つた。斯くの如きは偶々「ファイドン」の諸學說が、其の作家によつて拋棄せられなかつた證左と見らる可きものである。(Camb. Anc. Hist., op. cit., p. 333.)。

プラトーンの逝去前に書かれた著作中「エウデーモス」に次いで重要な物は「プロトレプチコス」(Προτρεπτικός)である。此の書はイソクラテースによつて完成せられた勸告、即ち παραίνεσις に倣つて、キュプロスの君主テミソン(Θεμίσων)に宛てられたものである。アリストテレースは、テミソンの富と地位とが特に彼れをして哲學的生活に適合せしむることを說いてゐる。プラトーンの見解に據れば、國家に於いて最大なる善を實現し、而して惱める人類に援助を與へんことを期待し得る人々は唯だ政治的權力を取得せる哲學者、若しくは眞面目に哲學に其の身を委ねた國王のみである。テミソンはアカデメイアの政治哲學を實現するに資す可きである。本書はプラトーンをして、其の生涯を通じて、實際的改革の事業から撤退せしめ、以つて眞理の宗敎的靜觀(θεωρία)に入らしめた衝動に對するアリストテレースの同情を示すものである。哲學者は實際生活の障害から能ふ限り妨害せられないやうに自己を守らなければならぬ。「プロトレプチコス」は、現身(うつせみ)の事柄に餘りに深く捲き込まるゝに至ることなく、人間の迪る誤れる足跡を傳つて其の路を踏み錯つことのないやうに吾人を警告する。總べて斯く如き事物は單に吾人が神への復歸を妨ぐるに過ぎない。我れ等の唯一の仰望は、我れ等が他日平和に死し、斯くて又此の緊密なる拘禁から我れ等の鄕土に復歸し得ることでなければならぬ。我れ等は眞理を追求し、而して之れに其の身を委ねるか、然らざれば、全然生命を絕つ可きである。蓋し餘餘總べてのものは愚擧と冗言に過ぎざるが故である。(Frag. 61, Rose, op. cit., p. 72, 1. 20.)。

五

長く恩師の下を去るに忍びなかつたアリストテレースは、プラトーンが西紀前三百四十八―七年を以つて其の世を辭し、其の甥スペウシッポス(Σπεύσιππος)がアカデメイアを主宰するに至つて後、幾許ならずして、雅典を後にして、トロアに於けるアソスの町に移つた。彼れは恐らくスペウシッポスを以つて學園を指道す可き最適材と考へることが出來なかつたのであらう。アリストテレースの雅典退出を以つて其の師プラトーンの死とは全然何等の關係なく、西紀前三百四十七年に於けるオリュントスの陷落と是れに由つて雅典に生じたフィリッポスに對する恐怖と憎惡とによつて決意せられたものであると主張する學者が存してゐる。(Wilhelm Oncken, Die Staatslehre des Aristoteles, in historisch-politischen Umrissen, I, 1870, S. 158-9; Blakesley, A Life of Aristotle, 1839, p. 36.)。然しながら彼れが雅典を去るに臨んで、其の同窓にして、後年スペウシッポスの後を嗣いで二十五年間アカデメイアを主宰したクセノクラテース(Ξενοκράτης)と行を共にしたと云ふ單純な事實は、プラトーンの死が其の

員因たることを確證するものである。アリストテレースとクセノクラテースとはプラトーンの門下に在つて好箇の對照を成して居つた。クセノクラテースは資性鈍重であつて、プラトーンは其の非凡の大才を練磨するが爲めに多大なる努力を行つた。彼はアリストテレースを呼ぶに轡革を必要とする駻馬を以つてし、クセノクラテースを稱するに、拍車を要する遲鈍なる驢馬を以つてしたと傳へられてゐる。後、スペウシッポスがアカデメイアを主宰すること僅かに八箇年にして死し、クセノクラテースが是れに由つて空虛と爲つた地位を襲つた時、アリストテレースは再び不快の感を禁じ得なかつたであらう。

雅典を去つたアリストテレースがクセノクラテースと共に其の勞作の新たなる舞臺として選んだアソス市はアタルネオスと共に專制君主ヘルミアス（Ἑρμίας）によつて支配せられてゐた。ヘルミアスは幼年の頃肉體的に傷けられた閹人であつて、エウブーロス（Εὔβουλος）と稱するアソスの前專制君主の奴隷であり、又初め銀行の勘定臺に兩替人として使傭せられたとも傳へられてゐるが、遂に首尾よくエウブーロスの至上權を受け繼ぎ、確く强く是れ等の都市を支配するに至つた。彼れはプラトーンとは個人的に相識ることがなかつたのであるが、又二人のプラトーン哲學者、スケプシスのエラストス（Ἔραστος）及びコリスコス（Κορισκος）と親交があつた。是れ等の兩者は久しくアカデメイアの生活を送つた後、其の鄕市スケプシスに歸つたものであつて、恰も他のプラトーン學徒が、或ひは君主の顧問若しくは指導者として、或ひは共產主義者及び暴主討滅者として他の地に於いて行つたと同じく、アカデメイアに於いて提唱せられた種々なる政治的改革をスケプシスに導入せんと試みたことは蓋し疑ひのない所であらう。多分プラトーンは是れ等二人と其の「隣人」ヘルミアスとの間に交誼を成立せしめんと欲したものであらう。蓋しプラトーンは是れ等兩學徒の高貴なる性質を認めてはゐるが、而も彼れは彼れ等が幾分空理に走れる學究たることを惧れたが爲めである。プラトーンは是れ等の三人が會合する毎に、相共に自己の發した書翰（即ちエラストス及びコリスコス宛のもの――吾人に傳存する彼れの第六書翰）を披見し、而して若し意見の合致せざる點あらば、雅典のアカデメイアの裁定に依賴す可き旨を彼れ等に勸告してゐる。（プラトーンの「書翰」は往々にして僞作と看做さるゝ所であるが、此の第六書翰が正眞のものであることはブリンクマン（Brinckmann）が有力に論證せる所である。Rheinisches Museum, N. F., Bd. lxvi, 1911, S. 226-）。アリストテレース及びクセノクラテースは是れ等の一團に招聘せられて、アソスに到り、此處に三ケ年を送り、アリストテレースはヘルミアスの姪にして養女たるピュチアス（Πυθιάς）を娶つた。（Strabo, XIII. i. § 57; Diodorus, xvi. 52.）。前揭エウセビオスの記す所に據れば、アリストクレース（Ἀριστοκλῆς）は、アリストテレースがピュチアスと結婚したのはヘルミアスの死後、彼の女が逃亡によつて其の身を免るゝの止むなきに至り、窮厄貧困の淵に陷つた際であつたと稱したと云ふことである。（Eusebius, Praeparatio Evangelica, XV. 2.）。

西紀前三百四十四―五年、波斯王の配下に屬して是れ等の地方に號令して居つた、ロトス產の希臘將軍メントル（Μέντωρ）はヘルミアスをアタルネオス市に閉ぢ込め、此處に彼れを攻圍して其の目的を達することを能はず、外交的折衝に言寄せて市外に彼れをおびき出し、卑怯なる手段を以つて之れを捕へた。ヘルミアスは俘囚として波斯王

の冬宮の在つたスーサに送られた。（Diogen L., V. 3.; Diod., xvi. 52.）。メントルは同時に兩都市及び其の他のヘルミアスの所領を奪つた。（ストラボンは、ヘルミアスを生擒した希臘の將軍を以つて、メントルの兄弟にして同じく小亞細亞の西海岸を支配して居つたメムノン（Μέμνων）であると做してゐる。XIII. i. §57.）。ヘルミアスは、スーサに於いて、彼れとフィリッポス王との間に締結せられたる密約に關して拷問を受けたが、固く其の口を緘ぢて處刑せられた。彼れは苛責を堪へ忍んで「余は懦弱なることも、又哲學に相當せざることも之れを爲さなかつた旨を余の友人及び伴侶に告げよ」と云ふ告別の辭をアリストテレース及びアソスの哲學者等に殘した。（Didymus in Demosthenem, col. 6. 15, Diels-Schubart, 1904.）。イェーガーは新に發見せられた文法家ディデュモス（Δίδυμος）がデモステネス（Δημοσθένης）の「反フィリッポス演說」（Φιλιππικός）に施した註釋を典據として、アリストテレースがアソスを去つたのは、猶ほ未だヘルミアスの生存しつゝあつた際であつて、後者は三百四十二年に至るまで沒落することがなかつたと說いてゐる。果して然らば、アリストテレースのアソス退出の原因をヘルミアスの沒落に歸する通說は支持し得ないことに爲る。（Jaeger, a. a. O., S. 117-8.）。

アリストテレースのヘルミアス追悼の情は深かつた。彼れはデルフォイに建立せられた其の知己ヘルミアスの空石塔の爲めに、自ら奉獻詩銘を作り、又彼れに對する美しき禮讚歌を草して之れを今日に殘してゐる。デモステネスによつて指導せらるゝ雅典の國民黨が故人を傷け、而して彼れに對する輿論がヘラスに於いては未定であり、全國土を通じてフィリッポス及び其の黨與に對する反感が熾烈であつた際に、アリストテレースは其の詩を通じて熱烈に彼れが故人の味方たることを世界に宣明したのである。（a. a. O., S. 118.）。

彼れの理想的國家の論述から現實政策への移動に際して重要なる役割を演じたものは實に此のアタルネオスの專制君主との接觸であつた。强大なる隣邦に對する恐怖、軍備の必要と云ふが如き非プラトーン的思想は茲に强く彼れを支配するに至つたのである。

六

アリストテレース等はアソスを去つて後、隣接レスボス島の首都ミュチレーネに移つた。レスボス島は彼れの共働者にして其の後繼者たるテオフラストスの鄕土であつた。彼れは此處に停つて敎授すること二三年にして、西紀前三百四十三―二年、マケドニアの宮廷に、當時十三四才の少年であつた王子アレクサンドロスの師傅として、其の父フィリッポスによつて招聘せられたと傳へられてゐる。アリストテレースがマケドニアに赴いたことは、彼れ自身が此の時代までに築き上げた學者としての名聲と、先王アミュンタスの侍醫及び顧問であつた其の父ニコマッホスの記憶とが相合して彼れをマケドニア王に推薦せしめた結果であると觀るよりも、寧ろマケドニアの政策を支持しつゝあつたヘルミアスの贊同を得て、彼れはペラに赴いたものと考へられなければならぬ。ゲルケ（A. Gercke）等はアリストテレースが其の間に於いて（三百四十四―二年）暫く雅典に滯在し、リュケイオン（Λύκειον）に於いて敎授したことを臆斷してゐるが、（Realenzyklopädie der klassischen Altertumswissenschaft, Bd. ii, col. 1014.）、イェーガーは斯くの如き推測を以つてイソクラテースの記述（XII. 18.）に對する輕率なる誤釋に基くものである

と做してゐる。（Jaeger, a. a. O., S. 117.）。

ヘルミアスの沒落を以つて三百四十一年とすれば、アリストテレースのヘルミアス讃歌及び詩銘はマケドニアに於いて草せられたものと見なければならぬ。波斯に對して示したアリストテレース等の敵愾心は又、當時マケドニアの宮廷に漲れる所のものであつた。當時に於いては、何れの市邦と雖も、希臘の統一を實現して、其の强大なる宿敵に當り得るの力を有するものはなかつた。舊邦は其の力を消耗し去つた。獨り將來を有するものは、是れまで希臘の局外に立つて居つた若い國々のみであつた。殊に前途の光明に輝いて居つたものは、北方の封建國家マケドニアであつた。早く既に西紀前三百四十二―一年に於いてフィリッポスは希臘歴代の仇敵に對する國民的戰役の計畫に想到した。雅典の修辭家イソクラテースは先づ其の三百八十年の「頌辭」（Πανηγυρικός）に於いて、希臘に對する雅典の功勞を稱讃し、スパルタ人に勸告するに平和的に雅典と覇權を分有す可きことを以つてし、而して希臘人に訴ふるに總べての內部的軋轢を一掃し、其の結合せる力を以つて夷狄を襲擊す可きことを以つてした。彼れは其の齡九十を重ねた西紀前三百四十六年、フィリッポスに建白して、總べての希臘人をして互に相和睦せしめ、其の結合せる兵力を波斯人に向はしめて、其の政策を遂行せしめんとした。フィリッポスは希臘に於ける土地及び商業貴族層を地盤として、希臘の統一を實現せんとしつゝあるものである。而して幾多の希臘市邦に於ける中層及び貧民層は是れ等の貴族層に對抗するの必要上波斯との同盟をすら希望するの傾向があつた。デモステネスは久しく雅典と波斯の同盟を畫して、成功を見ることが出來なかつた。ヘルミアスの如き先見の明ある政治家は、波斯帝國とマケドニア兵力の衝突を以つて避く可らざるものと觀た。而して彼れはフィリッポスに亞細亞の橋頭堡を與へ、而して彼れをしてアエオリアに於ける根據地を確保せしむるに由つて、彼れが北西小亞細亞に於ける苦心慘憺の後に獲得せる地位を維持するが爲めにフィリッポスの保護を仰がんとしたのである。而して彼れがメントル若しくはメムノンの爲めに捕虜と爲つた時、デモステネスは、彼れが拷問の苦に堪へ兼ねて、軈がてフィリッポスの密計を白日の下に暴露せしめ、而して波斯をして進んで雅典と同盟を締結するに至らしめんことを思ふて悅に入つたのである。（Demosthenes, Orations, X. 31.）。（爰に掲げたデモステネスの三百四十一年に於ける「反フィリッポス第十一演說」即ち一般に「反フィリッポス第四演說」（Κατὰ Φιλίππου λόγος Δ）として知らるゝものは、ワルケネール（Lodewyk Kaspar Valckenaer, Or. De Phil., p. 250.）、ヴォルフ（Friedrich August Wolf, Ad Demosthenis Leptinea Proleg., 1789, p. lx）及びベッカー（Wilhelm Adolf Bekker）等によつて、眞のデモステネスの演說と認められなかつたが、而も今や、新たに發見せられた前記ディデュモスに由つて、再び眞正のものとして承認せらるゝに至つた）。

アリストテレースが、アレクサンドロスの師傅として、マケドニアの宮廷に入つた時には、彼れは既に主として老功なる政治家ヘルミアスの感化によつてプラトーンの倫理的急進主義から、又彼れの理想的國家に關する思辨から、實際政策に向つて漸次に移動しつゝあつたのである。アリストテレースは、アレクサンドロスに說くに、彼れの「政治學」の最古の部分中に保存せらるゝが如きプラトーン的小市邦の理想を以つてしたのではない（縱令ひ、斯くの如き理想は形式上依然自治的なる希臘諸市邦に取つては猶ほ其の重要性を有し、又彼れは彼れが其の後、雅典に

於いて講義を行つた際には再び之を承認したとは言へ）。彼れは彼れが希臘に於ける指導的國家、當時の歐羅巴に於ける最有力なる王國世嗣の觀念を陶冶しつゝあつたこと、並びに彼れが同時にフィリッポスとヘルミアスとの間の外交的鏈環であつたことを熟知して居つた。ヘルミアスの死は總べての物に對して豫期せられなかつた轉廻を與へた。然しながら斯くの如くして破壞せられた連衡の反波斯的情操は、アリストテレースの情緒的生活の一部と爲つた、而して其の雰圍氣の中にアレクサンドロスは成長したのである。イェーガーは斯くの如くに說いてゐる。（Jaeger, a. a. O., S. 121-122.）。

アリストテレースはフィリッポス及びアレクサンドロスの信賴と寵遇とを受けて、主としてマケドニアに滯在し、時折雅典を訪れ、又フィリッポスの宮廷に於いて雅典人に對して一定の外交的勤務を致したるの觀がある。彼れは又此の有力なる地位に在つて其の出生の地を忘るゝことなく、西紀前三百四十九年より同七年に亘れるオリュントス戰役の間にフィリッポスによつて占領せられ破壞せられた幾多の希臘都市の中に在つた彼れの故鄕スタゲイロスに於いて若干の時を費したことゝ想像せられる。ファレーレウスのデメトリオス（Δημήτριος Φαληρεύς）の名によつて傳はる雄辯術に關する論篇（Περὶ Ἑρμηνείας）中に於ける彼れの書翰から抄出せられた「余は大王の爲めに雅典よりスタゲイラに赴き、又大寒の爲めに雅典からスタゲイラに赴いた」と云ふ辭句は此の時代のアリストテレースの生涯に關するものであるとグロートは說いてゐる。（ibid., s. 29; Frag. 669, Rose; Grote, op. cit., vol. I, p. 8.）。而も此の書翰の眞僞は極めて疑はしいものとされてゐる。而して、通說は、彼れを以つてプラトーンの死後から齡五十にしてリュケイオンを新設するに至るまで、雅典の地を踏むことなかりしものと做してゐる。アリストテレースはフィリッポスの許可と委任とを受けて同市の再興を指揮するが爲めに屢々スタゲイロスを訪れた。彼れは四散せる住民にして復歸せる者及び新來者に對して章程を設け、若しくは法律を起草したと稱せられてゐる。彼れの種々なる敵手は彼れに對して陰謀を企て、彼れに多大なる煩勞を與へ、而して同市の完全なる更新を阻害した。然も彼れの功勞は普く承認せられて、之れを記念するが爲めに年々祭典が擧行せらるゝことゝ爲つた。（Ammonius, Vit. Aristot.）。

尙ほプルータルホス（Πλούταρχος）の記す所に據れば、フィリッポスは、アレクサンドロスとアリストテレースの爲めに、校舍及び居住として王城南西の町ミエザに近きニュンファイの神殿及び杜を指定した、而して其處にはプルータルホスの時代に至るも猶ほ、アリストテレースの座した石の腰掛や、彼れが逍遙するの習ひであつた木蔭多き並木道が觀光客の觀覽に供せられてゐたと云ふことである。（Ploutarch., Alex., c. 7.）。而も恐らく此の校舍においてはアリストテレースとアレクサンドロスとは唯一の師匠と唯一の弟子ではなくして、一は敎授團の首班であり、他は最高のマケドニアの貴族社會から拔擢せられた學友等によつて圍繞せられて居つたのであらう。（Theodor Gomperz, Greek Thinkers, A History of Ancient Philosophy, vol. iv., trans. G. G. Berry, ed. 1929, pp. 21-22.）。フィリッポス二世は重なる家門の子弟を彼れの近習として自己の周圍に集め、貴族を其の權威の下に歸服せしめて、王國統一の業を完成せるものである。（「三田學會雜誌」第二十七卷第十號所載「ペリクレス時代以後に於け

る希臘の社會不安」九八頁參照）。アリストテレースを中心とせる此のミエザ附近の學園は、是れ等名門の子弟を教育するが爲めにフィリッポスによつて設けられたものではあるまいか。而して此處に講ぜられた實際的政治學說は、恐らく、マケドニアの支配下に於ける希臘の統一と政治的に統一せられた希臘の諸力を以てする全世界の支配を主張するものであつたことと考へられる。

七

這箇アリストテレースの生涯の第二期、即ち所謂遊歷時代に於いては、彼れは猶ほ自己を呼ぶにプラトーン主義者を以つてしてゐる。然しながら彼れは獨自の學園の主導者として彼れ自身の學說を體系化せざるを得なかつた。本來彼れの精神はプラトーンの晩年に於ける神秘的理想主義を承認するが爲めには餘りに精確であり、餘りに非想像的であつた、而して彼れは次第に其の師の其れから離れ、又屢々之れと相容れざる彼れ自身の哲學の體系を發達せしめつゝあつたのである。斯くの如き發達の先頭に立つものは、アソスに於ける學園の綱領と推定せらるゝもの であつて、斷片のみ今日に傳はる對話篇「哲學に就いて」(Περὶ φιλοσοφίας)である。

西紀前三百三十六年を以つて、アレクサンドロスはマケドニアの王位に即いた、而して波斯を初めとして、他の既知未知諸人民の征服を目的とせる彼れの偉大なる畫策は、軍事的及び帝國的作業以外のものに對しては何等の餘暇をも彼れに殘さなかつた。三百三十五—四年、アリストテレースは齡五十にして雅典に歸つた。曾つて彼れの學んだアカデメイアでは、クセノクラテースが三百三十九年にスペウシッポスの後を繼いで學頭と爲つてゐた。アリストテレースは雅典の東方、アポルロン・リュケイオス（Ἀπόλλων Λύκειος）の神殿に附屬せる體育館の行廊に於いて對抗的新學校を設立した。斯くて又、此の學校はリュケイオン（Λύκειον）と稱せらるゝに至つた。此の神苑は賢人隱者の好んで訪れた場所であつた。今やアリストテレースと其の學徒とは哲學を論じながら其の木陰を散步道（περιπατοι）を逍遙した。爰に「逍遙學派」（περιπατητικοί）の名は生じた。（Cicero, Academicae Quaestiones, i. 4.）。

多數の書籍、圖面並びに參考物品は普く蒐集せられた。彼れは朝には高等なる學徒より成る內部の集團の爲めに玄妙難解にして哲學的なる論議（ἀκροαματικά）を行ひ、而して夕には學問を愛好する公衆の一般團體の爲めに美辭法、辯證法及び政治學的知識に關する通俗的講話（ἐξωτερικά）を行つた。（Aulus Gellius, Noctes Atticae, xx. 5.）。尙ほ其の外にテオフラストス及びエウデーモス等の如き先輩學徒の講義があつた。彼れは又、前期に於ける著述を訂正增補し、精細なる調査を起した。彼れは早くからして人間及び自然の歷史に關する事實の蒐集、動植鑛物に關する記述、オリュムピア競技（τὰ Ὀλύμπια）に次ぐ重要なる希臘の國民的祭典たるピュティア（τὰ Πύθια）及び雅典人のディオニュシイア祭典（τὰ Διονύσια）に於ける優勝者名簿の年表に對する資料、一百五十八憲法の研究並びに無數の獨立小記錄を蓄積することに努めた。彼れは洵に觀察及び記述の新科學の創始者たる地位を有するものである。（Cambridge Ancient History, op. cit., p. 350.）。此の希臘憲法百五十八の蒐集が喪はれて今日に傳らないことは非常なる損失であると云はなければならぬ。唯だ全體に對する一種の規準として彼れ自ら筆を執つて著した其の第一編「雅典の憲法」（Πολιτεία Ἀθηναίων）が一千八百九十年埃及の古文書の中から發見せられて、翌九十一年大英

博物館の援助の下にケンヤン(F. G. Kenyon)によつて刊行せられたことは切めてもの幸福である。

彼れの門に學ぶ者の數は急速に増加し、アリストテレースは自ら筆を執つて飲酒に關する規則(νόμοι συμποτικοί)及び宴樂に關する其れ(νόμοι συσσιτικοί)を草するの必要に驅られ、又秩序を維持するが爲めに十日毎に彼れ等の中から主宰者を互選することを彼れ等に求むるを以つて便宜と見るに至つた、而して斯くの如きは既にクセノクラテースがアカデメイアに於いて行へる所のものであつた。(Diogen. L., v. 4.)。アレクサンドロスはアリストテレースの像を雅典に建設せしめ、(Adolf Wilhelm Theodor Stahr, Aristotelia, 1830-32, Bd. II. S. 290.)、又、其の研究の爲めに八百タラントンを與へ、(Athenæus, ix. 398.)、數千の人員を使用せしめたと傳へられてゐる。(Plinius, Historia Naturalis, viii. c. 16.)。

アレクサンドロスが亞細亞遠征の途に着いた時、彼れの命を受けてマケドニア及び希臘を統治したものは、彼れの將軍アンティパトロス(Ἀντίπατρος)であつた。彼れはアリストテレースの親友であつて、雅典市に於ける居留外人たる彼れは、アンティパトロスから有力なる保護を受けて其の講義と研究とを續くることが出來た。アリストテレースが雅典に於いて公務に容喙することを慎んだのは、ブランディス(Christian August Brandis)の如く、之れを其の性質上の一特色として觀るよりも、(Aristoteles, S. 65.)、寧ろ彼れが雅典の市民に非ざるが故に、直接之れに關與するの資格なきに因る所多きものと解釋す可きである。(Grote, op. cit., p. 10.)。

雅典に於けるマケドニア黨は特に富者階級の間に有力であつた。庶民黨は屢々土地分割、債務解除の喊聲を上げた。頻々として襲來せる社會革命の脅威は、實に當時に於ける有產階級をして、現存制度の鬪士としてマケドニアに依頼するに至らしめた一原因である。彼れ等の多數に取つては、マケドニアは久しく、法と秩序の自然的藩屏たるの觀があつた。(前掲拙稿一一五頁)。國民主義者に取つては、テモステネスとアイスヒネス(Αἰσχίνης)との間に行はれたやうな論戰を演じて之れに打ち勝ち、斯くて又、民衆を暫く彼れ等の味方たらしむることが猶ほ容易であつた。然しながら、彼れ等はマケドニアの鋒先に對しては無力であり、又、最早敎養ある人々の支持を受くることが出來ないやうになつた。デモステネスの努力が失敗に歸したことは主として是れ等の人々の冷淡に基くものである。知識社會に取つては、直接にマケドニア政府と緣故ある學派の精神的援助を受くることが判然たる利益であつた。新集團敎育上に於ける此の學派の影響は、何等かの政治的綱領を通じてよりも、寧ろ彼れ等が暗默に行へるデモステネス流の國民主義排斥を通じて作用したのである。アリストテレースは固よりアイスヒネス及び其の黨與の爲した如く、デモステネスを以つてハイロネイアの戰役に對して責任あるものと思惟するほど短見ではなかつた。デモステネスに關する彼れの保存せられてゐる唯一の言は斯くの如き見解を排斥する。然しながら是れを以つて直ちに彼れがデモステネスの態度に對して幾分の了解を有して居つたものと想像することは出來ない。デモステネス及び國民主義者はアリストテレース學堂を以つてマケドニアの機密探偵局と看做した。唯だ彼れは其の甥デモハレス(Δημοχάρης)が三百〇七—六年に、如何なる哲學者と雖も、五百人院及び民會の許可なくして雅典に於いて敎授す可らざることを命じたソフォクレース(Σοφοκλῆς)の布告を辯護せる際に行つた如く、聲を大にしてアリストテ

レースと其の學徒とを讒謗することがなかつたまでである。ソフォクレトスの布告は、西紀前三百〇六年、「都市攻園者」と綽名せられたデメトリオス（Δημήτριος Πολιορκητής）によつて雅典の民主政治が復興した際に、マケドニアと親善なる關係を有する諸學校を廢止し、テオフラストスを追放せるものである。（Jaeger, a. a. O., S. 335.）。

アリストテレースは又、アレクサンドロスの爲めに、「王國論」（Περὶ Βασιλείας）及び「アレクサンドロス、一名植民論」（Ἀλέξανδρος, ἢ ὑπὲρ ἀποικίας 若しくは ἀποικιῶν）の二篇を草したと傳へられてゐる。是れ等の兩篇は孰れも對話篇たるの觀があるが、今日に傳らない。其の一若しくは兩篇に於いて、彼れは、アレクサンドロスが如何なる態度を以つて彼れが亞細亞に於いて新たに取得した帝國を支配す可きか、又希臘人と土著の亞細亞人との間には如何なる關係を成立せしむるを適當とするかに關して彼れに建白を行つたものと觀られてゐる。（Valentine Rose, Aristoteles Pseudepigr., S. 92-96; Bernays, Die Dialoge des Aristoteles, S. 51-57.）。（イェーガーは、「王國論」を以つて、彼れがフィリッポスの子に國王教育を施して居つた時期に屬しなければならぬものであつて、寧ろ同期の終末を示すの觀あるものと做してゐる。a. a. O., S. 271-2.）。

而も、アレクサンドロスとアリストテレースとの關係は、其の親戚カルリステネス（Καλλισθένης）の獄死に由つて影響を受けたことゝ思はれる。アレクサンドロスの遠征には幾多の哲學者や文士が加はつた。アリストテレース自身は雅典に退去したが、而も彼れの代りに、哲學者にして又歴史家たる其の甥オリュントスのカルリステネスを隨行せしめた。彼れはアソス及びペラ時代を通じて其の小父の門下に在つたもので、其の後、アレクサンドロスが東征の途に上る直前、彼れはアリストテレースを助けてデルフィニア祭典（τὰ Δελφίνια）の優勝者の名簿を作成して居つた。彼れが其の小父の許諾を得て、アレクサンドロスの本營に加はつた目的は最初からしてアレクサンドロスの事業を記錄するに在つた。ペクトラに於いて、アレクサンドロスがゾエウス神（Ζεύς）の子であると公然言ひ出したものは彼れであつた。彼れは其の鄕市オリュントスの再建を企てゝ居つたが爲めに、彼れの歡心を買ふに急であつた。彼れは又、遠征の史家として自己の重要性に關して誇張的の意見を有し、アレクサンドロスの令名はアレクサンドロスの業績に依賴せずして、カルリステネスの記錄に依賴すると稱したと傳へられてゐる。西紀前三百三十年後幾許ならずして彼れは當時に至るまでのアレクサンドロスの事蹟を公表するが爲めに使を希臘に遣した。此の著は希臘の反對黨を目標として、アレクサンドロスの鴻業を宣傳するが爲めに著されたものであつて、彼れはアレクサンドロスの新聞係と稱せられた。

然るに此の大王の新聞係は、波斯流の平伏敬禮（προσκύνησις）の問題に於いて遂に大王に背いた。アレクサンドロスは、此の問題に關して、ヘファイスチォン（Ἡφαιστίων）及び其の他のマケドニア人の支持を受けた。王もヘファイスチォンも、彼れがクリマックス山麓のパムフュリアの海岸を進行して居つた際に、波が「ゾェウスの子」の前に平伏したと逃べてゐるカルリステネスは當然彼れ等を援護す可きものと信じた。洵に或る者は彼れが之れを援護す可きことを約束したと確言した。然しながら實際に平伏の禮が導入せられた時、カルリステネスは意外にも哲學者的威嚴を示し、此の亞細亞的慣習を亞細亞人のみに限る可きことをアレクサンドロスに求めた。王は爾後已むなく之れに

從つたのであるが、而もカルリステネスに對する憤怒を禁ずることが出來なかつた。偶々三百二十七年、アレクサンドロスの小姓にしてカルリステネスの監督の下に在つたヘルモラオス（Ἑρμόλαος）が、猪狩の際、王に第一擊の名譽を與へなかつたが爲めに、其の馬を取り上げられ、笞撻せられたるを怨んで、其の朋友を鳩合し、王を弑虐しやうとした陰謀が暴露した時、（Quintus Curtius Rufus, Historiarum Alexandri Magni Libri Decem, viii. 6-8.）、カルリステネスは彼れが曾つて少年輩に向つて說いた暴君弑虐の暴論に累せられて投獄せられ、三百二十八年に死んだ。大王の侍從にして歷史家たるハレス（Χάρης）は、大王に對する非難を防ぐが爲めにカリステネスは獄裡に於いて病死したものと記してゐるが、恐らくは陰謀に與せるものとして處刑せられたのであらう。

斯くの如き殘酷なる處置は大王に對するアリストテレースの感情を暗からしめなければ已まなかつた。アレクサンドロスの母オリュムピアス（Ὀλυμπιάς）は後年、其の子の夭折を以つて憤激せるアリストテレースの援助によつて、アンティパトロス及びカツサンドロス（Κάσσανδρος）の行へる所であると云ふ風聞を甦らせた。斯くの如きは恐らく權變極りなき彼の女が其の敵を傷くるが爲めに自ら創作した所であらうが、而もアレクサンドロスがカルリステネスの死に由つて、アリストテレース學派の敵意を買つたとは疑ひなき所である。テオフラストスは一小篇「カルリステネス」中に於いてカルリステネスの死を哀悼し、アレクサンドロスに暴君の汚名を與へた。逍遙學派の一人であつたファレーロンのデメトリオス（Δημήτριος）は直ちに同學派を其の子アレクサンドロスの敵カツサンドロスに屬せしめた。後述す可きが如く、デメトリオスの下に在つて、アリストテレース學派は全盛を極め、アリストテレースの思想の多くは法の形態を取つて現るゝことゝ爲つた。

八

アリストテレースは雅典の土地的及び商業的貴族によつて支持せられたマケドニア政府の保護を受けて居つたとは云へ、彼れの同市に於ける地位は又、其の實際的政治理論をして中層階級的觀念形態と一致せしめなければならなかつた。

前揭「王國論」及び「アレクサンドロス、別名植民論」の二篇がアリストテレースに存して居つたことは、單にアレクサンドリアの書目に據つて窺知し得るのみであつて、彼れの「政治學」は全然アレクサンドロスに就いて何事をも說いてゐない。而して彼れは又、此の書中に於いてはアレクサンドロスなるものが未だ曾つて存在することがなかつたかのやうに都市國家に執着してゐる。此の書中に現れた所だけでは、彼れは其の眼前に遂行せられた世界的變化の重要性を考へたことがなかつたやうにすら思はれる。王政が希臘其の者に於いて行はるゝに至る可きものであると云ふ觀念は遂に彼れの心裡に生ずることがなかつたやうに觀える。雅典に於けるアリストテレースと亞細亞に於けるアレクサンドロスとの連接は主として自然科學の領域に限られて居つたやうである。アレクサンドロスはアリストテレースの提議によつて、ネイロス河の水源を探檢せしめたと傳へられてゐる。彼れは逍遙學派の爲めに、彼れの遠征に從つた學者團によつて行はれた亞細亞の動植物に關する實地調査の結果を雅典に送つた。實際政策上に於いては是れ等二大偉人の間の交渉は最早存在せざるに至つたものと觀なければならぬ。吾人が他の機會に於い

て言へるが如く、アレクサンドロスが其の亞細亞征服中に發達せしめた政策は、彼れが之れに着手した當時に於いて抱懷した所のものとは本質的に相違せるものであつた。（前掲拙稿九八頁以下參照）。アリストテレースは彼れに敎ふるに夷狄は本來奴隷として取扱はれなければならぬことを以つてした。而もアレクサンドロスは既に此の點に於いてアリストテレースの正しからざることを學んだ。彼れは埃及及びバビロニアの古き文明の精華を見、戰場に於ける勇敢なる波斯の貴族を見た。彼れは希臘人及び波斯人が雜婚と共同の軍務とに由つて同輩として相共に結合せしめらる可き一大帝國の建設を企圖するに至つた。都市的自治の觀念から希臘的統一の其れに進んだものは、更らに希臘的統一の觀念から人類的統一の其れに進まんとしつゝあるのである。彼れは實にヴェノーン（Ὕβρις）の世界的國家の夢想に對して感悟を與へたものであつた。（昭和四年版拙著「經濟學前史」三〇一―三頁參照）。「政治學」に現れたアリストテレースは古き國家禮拜に代る可き何物をも有しなかつた。彼れは科學的には將來の先驅者であつたであらうが、倫理的には過去に屬するものと爲つた。

スタゲイロスの人であつたアリストテレースは、雅典の民主主義者の感情に於いては外來のものであつた。彼れのアレクサンドロス及びアンティパトロスとの朋友關係は彼れ等を遠ざけた。アリストテレースは後年大王の信任を失つたとは云ひながら猶ほ雅典に於ける彼れの居留は專らアレクサンドロスに依賴して居つた。恰もアレクサンドロスの即位が、雅典に於ける彼れの敎育家としての目覺ましい生涯を開始せしめたと等しく、彼れの死は之れに終りを告げしめた。アリストテレースは親マケドニア主義者であり、或る程度まで反希臘主義者であると看做された。斯くの如き情操は彼れと同時代の田園詩人テオクリトス（Θεόκριτος）の冷刻な短嘲詩に現れてゐる。（Diogen. I., v. 11.）。彼れの雅典に於ける講義は、彼れが依然として希臘的都市國家に執着し、而して彼れの理想がプラトーンの其れの如く、專ら其の發達と改新とに懸つて居るを示すに努めた。彼れは希臘人を眺むるにマケドニア王國の臣下を以つてすることなく、其の同盟者を以つてした。然しながら、是れを以つてしても猶ほ、曾つてアレクサンドロスの師傅であり、彼れの保護を受け、其の名代アンティパトロスと親密なる關係を有しつゝある此の哲學者は、雅典市民の大多數の眼にマケドニア黨として映ずることを如何ともすることが出來なかつた。彼れとアレクサンドロスとの關係の變化も、彼れが依然としてアンティパトロスと親善なる關係を維持して居つたが爲めに、雅典人の注意に上ることなく、又彼れに對する彼れ等の意見を變更せしむることもなかつた。

アレクサンドロスが、病むこと僅かに十一日、壯齡三十二にして西紀前三百二十三年六月（若しくは五月）を以つてバビロニアに長逝したと云ふ報知が愈々確實と爲つた時、抑壓せられた反マケドニア的情操は唯り雅典のみならず、希臘全土を通じて一時に高潮した。マケドニア黨に對する唯一の保護はアンティパトロスであつた。然しながら、彼れも亦、アリストテレースと等しく、近くアレクサンドロスの信任を失ひ、而して王の死去の際には、恰もバビロニアに向つて小亞細亞を進軍しつゝあつたのである。マケドニア黨の政治家と看做されて居つたフォキオン（Φωκίων）は雅典に殘留して、アンティパトロスに對する開戰の提議と效果なき爭ひを續けて居つたのであるが、彼れの一味はアンティパトロスと結合するが爲めに同市を去つた。アリストテレースは國民主義者の突擊を避けて

遠く、其の亡母の一族の鄕里であり、彼の女から相續した財産を所有して居つたエウボイアのハルキスに逃れた。而も彼れは長く此の退居の生活を續くること能はずして、三百二十二年、胃患の爲めに歿した。（Censorinus, De Die Natali—Ménage ad Diogenes L. v. 16.）。而もエウメーロス（Εὐμήλος）等は彼れが毒を仰いだと主張し、デイオゲネス・ラエルティオスは此の風説に信用を與へてゐる。（Diogen. L., v. 8.）。

彼れは其の死を豫知したるものゝ如く、ハルキスに於いて、今日に傳存せる遺言狀を認めてゐる。（Diogen L., v. 11.）。之れには其の學校のことは何も記されてゐない。此の學校と之れに屬する一切のものとは既に彼れの生前に彼れの選んだ後繼者テオフラストスに委讓せられた。然しながらグロートの如きは、アリストテレースが、嘗だに其の學校のみならず、圖書館までも之れをテオフラストスの管理に委して雅典に殘した一事を以つて、彼れがマケドニア軍隊の力に依つて雅典國務の執行せらるゝに至るを待ち、再び同市に歸つて、クセノクラテースの下に在るプラトーン學園と對立して、其の學校を再開せんことを期した證左と做してゐる。（Grote, op. cit., p. 21.）。シュタール及びブランディスは、ディオゲネスの吾人に傳ふる所を以つて、單に彼れの遺言狀の拔書に過ぎざるものと做し、其の理由を同じく彼れに取つて極めて貴重なる其の圖書館に就いて何事も言はれてゐない一事に求めてゐる。（Stahr, op. cit., Bd. I. S. 159; Brandis, op. cit, S. 62.）。

遺言狀は其の劈頭に於いて先づアンチィパトロスを其の執行者として指名する。マケドニアの吏ニッカーノル（Νικάνωρ）は、彼れの娘ピュチアス（Πύθιας）が適當なる年齡に達すると共に之れと結婚して其の女婿たる可きものである。ニッカーノルは又、ピュチアス及びニコマッホスの兩者に對して、父と兄との結合せる關係に於いて最善の注意を與ふ可きものである。（Diogen. L., v. 12.）。ピュチアスは前述せる彼れの先妻ピュチアスとの間に生れた女である。アリストテレースは、此の婦人との結婚の爲めに、彼れと同時代の競爭者からも非難を受けたやうである。（Aristokles ap. Eusebium Præp. Ev., xv. 2.）。彼の女は早く其の夫に先立つて死んだのであるが、而も彼れ等の結婚生活は特に幸福にして高潔なるものであつた。彼の女は其の夭折に先立つて、彼の女の遺骨を夫の其れと共に横へんとするの希望を表明した。アリストテレースは其の遺言狀中に於いて、此の希望の實現せらる可き旨を述べてゐる。（Diogen. L., v. 16.）。彼れの男、ニコマッホスは彼れの後妻ヘルピュルリスの產む所である。彼の女は妾であつたと稱せられてゐる。ヘルピュルリスなる名は彼の女の外は唯り娼婦（ἑταίραι）の仲間にのみ存する所である。彼の女はアリストテレースの臨終に至るまで之れと同棲した。彼れは其の遺言狀に於いて不足なき資產を彼の女に與へてゐる。（ibid., 14.）。彼れの女婿たる可く定められたニッカーノルは彼れが孤兒と爲つた際に彼れを監督したプロクセノスの子であつた。彼れはアレクサンドロスの本營附の幕僚であつて、三百二十四年、オリュンピア祭に集つた希臘人に重大なる勅書を傳へた人物である。此の勅書は暴慢なる態度を以つて、あらゆる希臘都市に對し、總べての追放人を召還す可きことを命じ、而して即時之れを受諾せざる者は、アンチィパトロスによつて立ち所に峻嚴なる懲罰を加へらる可きことを命せるものであつた。此の專斷的なる行爲によつて生ぜしめられた印象は殊に雅典人に對して深刻であつた。此の忌はしき勅書を齎したニッカーノルに對してアリストテレースが父の如き

愛情を寄せて居つたことは周く知らるゝ所であつた。マケドニア黨と目されて居つたアリストテレースの不評は、此の事件によつて一層大と爲つたものと想像される。（Grote, op. cit., p. 14-16.）。

此の事件のあつた翌年、アリストテレースは常例の不敬神（ἀσεβεια）の罪を以つて告發せられたのである。彼れはアンティパトロスに與へた書中に於いて、雅典は望ましい居住地ではあるが、而も阿諛と誤れる告發の流行とは、其の價値に對する歎かはしい引け目であると記し、而して雅典人が一度びソクラテースに對して犯せるが如く、重ねて哲學に對して罪を犯すことなからんが爲めにハルキスに退隱すると述べてゐる。（Ammonius, Vit. Aristotelis, p. 48; Ménage ad Diogen. L., v. 5; Claudius Aelianus, Variae Historiae, iii. 36.）。デメーテル・エレウテリオス（Δημήτηρ Ἐλευθέρος）の司祭長エウリュメドン（Εὐρυμέδων）によつて代表せらるゝ宗教上の正統派は、史家エフォロス（Ἔφορος）の子デモフィロス（Δημόφιλος）によつて其の始祖以來の怨恨を傳へてゐるイソクラテース學派と協力して彼れを告發したのである。不敬神の徵證として擧げられたものゝ中には、彼れのヘルミアス禮讃が存して居つた。（Diogen. L. v. 5; Athenæus, xv. 696.）。彼れの最後の著作の一は、不敬神の告發及び之れを支持する非難者の主張に對する辯護であつた。彼れが墓を建て、現身の人間として彼れに對して葬禮を擧行したことが隱れもない事實であるに拘らず、彼れが不死の神としてヘルミアスを尊敬せんと欲したと主張する非難者の矛盾を指摘せる辯疏書の一章が殘存してゐる。（Athenæus, xv. p. 696, 697.）。（而もツェラーは是れを以つて僞作と看做してゐる。（Zeller, a. a. O., S. 33.）。

アリストテレースは有福なる醫師の家に生れ、今は又、可なりの財産を殘して流寓の地に不歸の客と爲つた、囊きに掲げた彼れの遺言狀は其の執行人等及びニッカーノルに對して、後妻（若しくは妾）ヘルピュルリスの爲めに、彼の女が既に貰ひ受けたものゝ外、遺産の中から、銀一タラントンと彼の女が現在有する下婢の外、彼の女の選ぶが儘に三人の女奴隷並びにピュルラ產の下男（ピュルラエオス）を、又、彼の女にしてハルキスに滯留するを欲したならば、庭園に接した小屋を、スタゲイロスに住はんと欲するならば、彼れの父の家を與ふ可きことを命じてゐる。彼の女が是れ等兩家屋の孰れを選ぶとを問はず、執行者等は彼れ等が適當と考へ、又ヘルピュルリス自身が嘉納す可き家具を之れに備ふ可きである。（Diogen. L., v. 14.）。彼れは尙ほ此の書中に於いて、男女數人の名を擧げて（其の多くは奴隷）、之れに對して一定の恩惠を與へんことを命じてゐる。アムフラキスは其の自由を與へられ、而してピュチアスの結婚に際しては五百ドラッフマと彼の女が現在有する下婢を與へらる可く、タレに對しては、彼の女の有し、又購入せられた下婢の外に、一千ドラッフマ及び下婢一人を與へらる可きである。（ibid., 15.）。斯くの如きは相當なる資産ある者に非ざれば到底爲し得ざる所である。早く彼れの受けた非難の中に、其の師プラトーンに對する忘恩、マケドニアの權勢に對する屈從と相並んで、衒耀及び放縱等の惡習があつた。彼れの衣裳は高雅であり、華美ですらあつた、彼れの食卓は善美であり、贅澤ですらあつたと傳へられてゐる。（Eusebius, Præp. Ev., xv. 2.）。彼のケフィソドロスの如き難者の言の直ちに信ず可らざることは勿論であるが、而も彼れが有福なる生活を送つて居つたことは、容易に想像し得らるゝ所である。ソクラテースの言ふが如く、民主政治（δημοκρατία）を構

成する「民」(δῆμος)が、市民中の貧民階級たるの時、(Xenophon, Memorabilia, III. vii. 6.)、彼れは決して是れに對して同情を有し得るものではなかつた。

九

アリストテレースはプラトーンに比して劣ることのない貴族主義者であり、專ら、完全なる市民權を享有せる少數自由民の見地から政治的生活を考察した。而もアリストテレースはプラトーンの共產主義的意見に對して、有產階級の支配を主張した。斯くの如き階級が多數であつて、極富極貧兩社會層の結合せるもの、若しくは少くとも其の分立せるものに對して優勢であるとしたならば、該都市は必然最も善く統治せらるゝを得可きものであると思惟した。自己を一方に投ずるに由つて平衡を確保し、勢力の偏重を抑制するものは此の階級である。從つて、適度にして合宜なる財產を所有することは、市民の最大なる幸福である。支配權にして有することの多きに過ぐる者、若しくは有することの少なきに過ぐる者の手中に存したならば、そは最惡なる煽民政治と爲るか、然らざれば、專制的寡頭政治と化するであらう。而して極端なる民主政治及び純乎たる寡頭政治は直ちに僭主政治に赴かしむるものである。而も其の社會の成員が殆んど互に平等である場合には、斯くの如き虞れは遙かに稀れである。中層階級のみ唯り暴動の虞れがない。此の階級の多數である所に於いては、社會を攪亂す可き躁暴及び叛亂を生ずることが稀れである。而して彼れは同一の理由に基いて、廣大なる國家に在つては人民の蜂起を見ることが最も少ないと說いてゐる。即ち是れ等の國々に於いては中層階級が頗る多數であるが爲めである。之れに反して小市は屢々二個の陣營に分割せられる。即ち斯くの如き國家には中層階級を殘すこと少くして、一半は富裕に、他は貧窮なるが爲めである。(Pol., IV. xi.)。

彼れの說く所に據れば、富は決して一切幸福の究竟原因ではない。富は方便であつて斷じて目的たることを得ない。ソローンは「富に對しては如何なる限界も人に對して定めらるゝことがない」と言つてゐるが、而も善良なる生活の爲めに要せらるゝ財產の高は無制限なるものではない。純眞なる富は善良なる生活に資するものである。而して自然に從へる富は無限に非ずして、各個の場合に於いて極めて明確なる定限を有する。そは或る者をして生活上の主たる諸目的を取得せしむる以上に出づ可きものでない。何等の定限なきものは唯り蓄財家の富あるのみである。(Pol., I. viii.)。

アリストテレースの優れた常識と中庸とは徹底的にプラトーンの共產主義を排斥せしめたと稱せられてゐる。然しながら、プラトーン自身は、眞の意味に於ける共產主義者でもなければ、亦、社會主義者でもなかつた。彼れの「國家篇」中に表明せられてゐる所謂「共產主義」は、上層階級に連る者をして其の身を全然公務に獻げしめ、利己的動機によつて轉向せしめらるゝことなからんが爲めに私有財產及び家族を拋棄せしめんとするに在る。被支配的多數民衆は彼れの計畫と直接の交涉なきものである。希臘に於ける種族的國家の崩壞、都市的國家の發生以後に於ける農業及び工業の分離は、人民の多數をして、土地を離れて、工業に衣食するものたらしめ、之れに從事する者をして社會上重要の地位に立たしめた。而も遂に大規模の生產を發達せしむることの出來なかつた雅典社會の民衆は

被傭勞働者たるよりも、寧ろ自己の勞働を使用しつゝある獨立手工業者であつた。當時の社會に在つては殆んど全く賃銀制度の存在を見ることがなかつた。（昭和七年版拙著「重商主義經濟學說研究」七五〇—一頁參照）。プラトーンは其の「國家篇」に於いて、私有財產及び家族生活が第二階級たる武人の倫理的生活と相容れざるものであり、斯くて又、國家の倫理的生活の支障たることを信じたが爲めに、彼れは此の階級に對して是れ等の二者を拒否するのである。而も彼れは、自由の勞作階級が能く其の仕事の價値に相當する報酬を受けて、其の身分に相應せる生活を維持し、安んじて其の業務に精勵し、自己と其の家族とを扶持す可きことを欲した。（cf., Rep., IV. 421 C-D.）。アリストテレースは總べての倫理的生活が私有財產の所有と家族生活の訓練とを要することを信じたが爲めに、彼れはあらゆる市民に對して是れ等のものを擁護したのである。

既述の如く、土地の再分配及び債務の解除は往々にして庶民黨によつて絶叫せられた。然しながら過激的政治家が訴へんとして最後の手段も、精々斯くの如き要求に過ぎざるものであつた。土地の分配は決して土地の社會化を意味するものではない。そは土地を離れて、都市に群集せる貧民が再び土地の上に其の權利を取得せんとする切實なる要求であつた。プラトーンの「法律篇」に在つては、土地は事實上國有財產であるが、而も市民の間に出來得る限り、平等に分配せられてゐる。（Legg., V. 737 C-E, 745 C-E.）。アリストテレースは財產を規制するよりも、人口を制限するを以つて一層の急務と做して、其の師の計畫に反對したのである。（昭和四年版拙著「經濟學前史」二九三—六頁參照）。債務抹消の要求は又、富裕なる資本所有者の行動が他の市民に取つて有害なる影響を有し、彼れ等の徵する利子は高率であり、彼れ等が支拂を要求するの手段は苛酷であつて、全社會の憎惡が彼れ等の上に集まれるに乘じて煽民政治家によつて提起せられたものである。プラトーンは高利貸を呼ぶに、其の刺針、即ち貨幣を彼れ等の犧牲者に差し込んで、親金に對して利子を徵して之れを損傷する蜜蜂を以つてしてゐる。而してアリストテレースは又、小金貸業を以つて人爲的形態に於ける取財術の極端なる發達と做し、之れを以つて徹頭徹尾不自然にして嫌惡す可きものと考へた。而して、彼れの眞意が一切の貸金業務を以つて悉く不自然にして且つ賤劣なるものと做すに存したことが明かであるに拘らず、彼れが特に小金貸業務（ἡ ὀβολοστατική）なる文字を使用したことは、大金融業者に對して幾分の顧慮を做せる結果であつたかも知れない。（「前史」一三六—一四〇頁參照）。

洵に西紀前第四世紀の雅典に於いては、彼の喜劇作者アリストファネス（Ἀριστοφάνης）が其の「婦人議會」（Ἐκκλησιάζουσαι）の題材たらしめたが如き「萬人が萬物を共同に享有し、同一の財產に依つて生活し或る者が殷富を極め、他の者が赤貧の境涯に沈淪し、一が廣大なる農圃を有し、他が自己の柩を埋葬するに足る土地をすら有することなく、一が大勢の奴隷に護侍せられ、他が一人の下男をすら有せざるが如きことなからしめ」、而して「あらゆる人に取つて共通なる生活の標準を定め、而して何等の差別をも設けざらんとする」一般的私有財產社會化の計畫が存して居つた。（「前史」二五二—五頁參照）。然しながら、當時に於ける社會主義的企圖は全く空中樓閣的のものであつて、終に人民の心胸に侵徹することがなかつた。雅典に於いては、遂に社會主義的黨派の存立を見ることなく、又何等眞摯なる社會主義的宣傳も行はるゝことがなかつた。而して「婦人議會」中に現るゝ共產主義的社會改造の計

畫すら、土地耕作の如き一切の勞働は之れを奴隷の肩上に擔はしめて、自由市民の總べては一切の生産的勞働より免れんとする「怠惰者の理想鄕」の實現に在るものであつた。

希臘市邦は必ずしも有閑の鄕土ではなかつた。又、其の市民の生活は奴隷制度を基礎とするものではなく、彼れ等は一般的に勞働を蔑視するの傾向を有するものでもなかつた。而も富裕なる市民の享有せる富と、安らかなる生活を送りつゝある工匠の享受せる安慰とが、共に奴隷の勤務に依賴する所の大なるものであつたことも亦、吾人は之れを認めなければならぬ。而して雅典市民の大多數を形成して居つた一般工匠と農民とが其の收入の基礎を奴隷勞働に置くことを得ないで、彼れ等自身の勞働によつて生計を獲得するの必要に驅られて居つた事實は、往々にして奴隷制度の擴張に基礎を置く一種の共産主義を夢想せしめた主因である。（「前史」二二一—二二頁）。

プラトーンもアリストテレースも共に一切無差別に奴隷制度に反對するものではなかつた。プラトーンは其の「國家篇」の第五編に於いて、希臘人を奴隷たらしむることに反對して居るが、而も其の「法律篇」に於いては、率直に奴隷制度の必要を認め、農業をすら他の產業と等しく奴隷の手中に委ねてゐる。（「前史」二一六—八頁參照）。既にソヒストが人間の根本的價値及び親族關係說を敎へ、奴隷を以つて自然的制度であると主張する學說に對して反對說を提唱せることを知悉して居つたアリストテレースは其の經濟的必要に對する意識的信仰を通じて斯制度を擁護しやうとした。彼れは又、戰場に於いて捕虜と爲れる者が征服者の奴隷と化する所謂因襲による奴隷（νόμῳ δοῦλος）の問題に關して、賢明なる人々の間に於いてすら意見の相違あることを承認した。西紀前四百十三年シュラクーサイに於ける敗北の後、多數の雅典人はシケリア及びペロポンネソスに於いて奴隷として勤務しなければならなかつた。スパルタの提督カルリクラチダス（Καλλικρατίδας）は、彼れが四百〇六年にメチュムナを襲擊した時、彼れにして之れを防止することが出來たならば、如何なる希臘人も奴隷たらしめらるゝことなかる可きを誓約した。（Xenophon, Hellenica, I. vi. 14-15.）。而してテバイ人が三百七十年の終りに、長く隷屬の境涯に在つたメッセニア人をスパルタ人の手から解放せる後に於いて、問題は特に尖鋭化した。イソクラテースはスパルタを辯護し、アルキダマスは「神は總べての人間を自由の身として此の世界に送つた、而して自然は何人をも奴隷たらしめず」と抗議した。然るにマケドニアのフィリッポスは多數の希臘人を奴隷たらしむることを敢てした。マケドニア王室と密接なる關係を有して居つたアリストテレースは明かに、自然が奴隷たらしむることを期せる夷狄に對してのみ奴隷制度を適當と看做さうとして居つたのであるが、戰に敗れた希臘人を奴隷たらしむるの一事に關しては明快なる論斷を下すことを避けてゐる。（Camb. Anc. Hist., op. cit., p. 529-530）「前史」二〇四—五頁參照）。

アリストテレースが、少くとも自然的奴隷（φύσει δοῦλος）を正當視したことは、是れに由つて市民が國家に奉仕するの閒暇（σχολή）を與へらる可きが故である。斯くて又、彼れは閒暇を有することのない總べての人々に對して市民權を拒否する。勞作者の業務は自由市民の生活と相容れざるものである。彼れに從へば、最高の意義に於ける幸福は哲學に存する。隨つて最高の理想は哲學者の生活であつて、そは閒暇を必要とする。（Eth. Nic., X. vii. §7.）。之れに次ぐ最善の生活は、善良なる市民によつて示さるゝが如き完全なる倫理的德の生活である。（ibid., viii.

35.)。農耕、牧畜、狩獵、漁撈の如き自然なるものと、工匠、日稼人、商人及び小賣商の業務の如き不自然なるものとを問はず、必要なる任務は德の發達に不利なるものであつて、更らに高尚なる事物の路を塞ぐものである。是れ等のものは必要ではあるが、高貴ではない。政治及び哲學（利得の爲めに行はるゝことがないとしたならば）は、明かに「必要なる仕事」に對置せられた「高貴なる仕事」の範疇に屬するものである。高貴なる職務を遂行する階級は國家の目的を達成するものであつて、從つて又、彼れ等は即ち國家である。必要なる職務を遂行する階級が國家の內に存在するは、彼れ等の存在がなかつたならば、高貴なる職務を遂行する階級が存在することを得ざるが爲めである。彼れ等の存在は已むを得ざる必要に基く。然らば、彼れ等の總べては何が故に悉く公私の奴隷たらしめられないのであるか。蓋し、自然の奴隷は其の知力が最も低く、其の價値が筋力に存するのであるが、商人若しくは工匠は更らに高等なる知性を必要とするが故である。必要なる職務が市民に委ねらる可きでないとしたならば、そは果して何人に歸せしめらる可きであるか。アリストテレースの理想國の經濟的下部構造は大部分希臘人以外の資料を以つて形成せらる可きものである。而して彼れは單に「必要なる仕事」を市民から引き離すのみを以つて滿足せず、「利得の術」に墮落した「取財の術」を淨化して、其の眞個の限界及び方法を意識せしめんことを努めた。（「前史」一六七―一八二頁參照）。吾人は他の機會に於いて、波斯戰役以後に於いて、商工的要素が其の勢力を增加し來り、政治的重心が五百人院から民會に移り、民會は全く晒布屋、靴工、大工、銅鍛冶、海商に從事する者、若しくは「市場に於いて交換を行ひ、安く買ひ入れて、高く賣り捌き得可き物に就いて考ふる者」から構成せらるゝに至つたことを述べた。而して其の多數を制し得るものは貧民階級であつた。（前揭「ペリクレス時代以後に於ける希臘の社會不安」八九頁）。アリストテレースの意見は實に此の勞作者の民主政治、即ち所謂「最惡なる民主政治」に對する反抗であつた。

洵にテーラァ（A. E. Taylor）の所言の如く、彼れの政治的理想は、市民の資格を享有することを拒まれた、深切に取り扱はれはするが、而も前途の希望のない階級の勞働に依り、其の物質的所要を供給せられて、靜かに技術と學問とを追求しつゝある、冒險と企業の精神によつて煩はされることのない、大財產もなく、又物質的富に於ける何等顯著なる相違もない、小ではあるが、而も有閑にして教養の高い貴族社會の其れである。（Aristotle, p. 8. 85.）。斯くの如き意味に於いての「貴族階級」なる語は又、限定せられたる意味に於いての「中層階級」と置き換へ得るものである。

十

アリストテレースの政治哲學の眞諦が果して當時の所有者階級によつて那邊まで會得せられたかは疑問であるが、而も彼れの私有財產擁護論並びに其の勞作者の民主政治に對する抗論が彼れ等によつて好感を以て迎へられたことは事實である。前揭アンティパトロスの子にして三百〇六年にマケドニア王と爲つたカッサンドロスによつて、雅典の長官の名稱を附與せられ、十箇年間同市を支配したデメトリオス（Δημήτριος Φαληρεύς）は全然富者の利益の爲めに行動した。彼れ等の見地から觀れば、雅典は此の時期ほど善く統治せられたことはなかつた。デメトリオスは民主

主義的財政制度を改廢した。斯くて富裕なる雅典市民に課せられた勤務（λειτουργίαι）並びに公務に對する報酬（μισθοί）は廢止せられた。（雅典の民主主義的財政に就いては「前史」二三五—二四一頁並びに「三田學會雜誌」第二十七卷第九號所載拙稿「ペリクレスの大工事に就きての社會經濟史的考察」四八—五九頁參照）。彼れは兵役の義務を減少し、艦隊を縮少し、而して三段櫂戰艦艤裝の義務、即ちトリエルアルヒア（τριηραρχία）を廢止して、最富裕なる市民の負擔を輕減した。彼れは國祭を改革し、歌舞隊を準備する富者の義務、即ちホレギア（χορηγία）を廢止し、其の費用を國家の負擔たらしめ、而して公の基金から國祭を取行ふが爲めに一年制の官吏即ちアゴノテチス（ἀγωνοθέτης）を任命した。而も尙ほ彼れは國家の收入を增加せしめたことに由つて稱讃せられてゐる。（Diogen. L., v. 75.）。而して減少した雅典の人口は、四百〇三年の舊態まで恢復することが出來た。（Ap. Athen. Lib. iv. cap. 20. p. 272 B.）。彼れは有福階級の利益の爲めに陪審法廷を改革した。彼れは逍遙學派の一人であつて、彼れの下に於いてアリストテレース學派は其の盛大を誇ることが出來た。彼れは異邦民テオフラストスをして、土地を購入し、其の學校をプラトーンの其れの如く、法律的に組織せられた團體たらしむるの權利を取得せしめた。彼れは多數の奢侈禁止法を發布して、結婚、祝宴及び葬式の費用を切り詰め、倶樂部の新設を禁止し、婦人の人中に於ける行狀及び其の衣裳を取締り、又、之れを勵行するが爲めに、アリストテレースの精神に從つて監察官（γυναικονόμοι）を任命した。アリストテレースは、其の「政治學」中に於いて、此の種の官吏を以つて、民主政治よりも寧ろ貴族政治に於いて看出さるゝ所であると做し、「何人か能く貧民の妻が人前に出づるを禁じ得可き」と說いてゐる。（Pol., IV. 15; VI. 8.）。

此のデメトリオスの執政中にキュプロス島からセム人の血を引いた商人の子が雅典に來た。此の人物こそ、アリストテレースに代つて、時代の思潮を指導す可き運命を有せるものであつた。ストア學派の始祖ヅェノーンが是れである。

西紀前第四世紀の雅典は未だ世界主義的ではなかつたが、而も前世紀に於けるよりも、より少く雅典的であり、より多く希臘的であつた。（Camb. Anc. Hist., op. cit., p. 511.）。異邦人に對する昔日の憎惡を廢し、自治を求む る根强き欲情を征服して、希臘統一の概念は其の歩を進めた。世界的市場の建設は猶ほ幾多の困難に遭遇しなければならなかつたが、而も人と物とが自由に往來するを妨ぐる一切の障害物を倒壞するが爲めに既に試みられた手段は一段の進歩を示した。然しながら、斯くの如き希臘の統一に向はんとする傾向の增加は又、雅典及び其の他の諸市邦の頽廢を物語るものであつた。市邦內に於ける貧富兩階級相互の憎惡、民主黨員對寡頭政治家の鬪爭は益々甚しきを加へた。舊邦は孰れも疲れた。獨り運命の星の煌いて居つたものは若いマケドニアであつた。農業は營利的見地から經營せらるゝに至り、土地を離れた貧民は都市に於ける勞働市民の數を增加したのであるが、而も都市の工業は是れ等の大衆を雇傭す可き大規模のものと爲ることを得なかつた。商業は希臘の都市が大と爲ることを得た唯一の方法である。而も農業的基礎を缺ける希臘諸邦に在つては、其の商業は工業を以つて之れを裏附けするに依つてのみ唯り維持せらるゝことが出來た。雅典は其の著例であつた。同國は世界的市場の確立に努力したが、而も眞

に能く航海の危險、國際關係の不安定、輸送費の不廉、交通組織の不完全に打ち克つことを得ずして、其の工業生産物の販路を充分に擴張することが出來なかつた。斯くの如き事情の下に於いて、工業的企業家が其の企業を膨脹せしむ可き限界を知り、其の勞働者數を限定しつゝあるの時、自己の都市内に於いて安住の地を看出すこと能はずして、放浪徘徊の境涯に陷りつゝある者に救濟を與へんとしたならば、希臘の總べての國々は昔日の植民地建設に向つて再び進出しなければならぬ。而も是れが爲めには、是れ等の諸國は共同の指揮官の下に結合しなければならぬ。斯くの如きはイソクラテースの演說中に繰り返された題目であり、又、斯くの如き經濟的目的を滿足せしめ、斯くの如き植民的發展の界域を發見せんとするものがアレクサンドロス大王の事業であつた。前述の如く、アリストテレースは時代の徵候に對して盲目ではなかつた。然しながら、少くとも彼れが雅典に於いて說き、又其の「政治學」中に殘存してゐる部分に於いて認めたものは、都市的共同體內部の倫理的頹廢の徵候であつて、外部に對する國家發展の共れではなかつた。彼れは、弛緩なる商的聯合と變じて、倫理的目的と倫理的訓練とを拋棄し去つた民主々義的市邦の社會倫理的批評家と爲つた。(Camb. Anc. Hist., op. cit., pp. 512, 514.)。

アリストテレースは、憂はしげな醫師の如くに、希臘民族の病床に附き添つた。(Jaeger, a. a. O., S. 335.)。彼れに取つては、其の師プラトーンに於けると等しく、小市邦は實に個人的道德の基礎であり、條件であつた。彼れの理想國に在つては、其の市民は相互に識り合ひ、唯だ一人の傳令によつて話し掛けられることの出來るほどの少數でなければならぬ。そは小ではあるが、完全であり、自足的である。獨立の市邦は、恰も、幾多の家が結合して、村を生じ、幾多の村が結合して市邦を生ずるが如く、文明の進むに連れて、更らに高き組織形態に發達するものでない。そは社會進步の窮極であり、目的である。彼れは又、其の「政治學」に於いて、市邦に取つて可能なる種々なる政體を分類し、考察してゐる。希臘に於ける寡頭政治と民主政治との間に存する眞の根本的相違は、前者が所有階級による政治であるに反し、後者が民衆による政治たるの事實に存する。而して彼れは最良なる政體たる理想的なる君主政體も、又、第二位の良政體たる理想的なる貴族政體も現實に存せざるが爲めに、民主政治から其の不良分子を排除し、寡頭政治の最良分子を加へられた混成的政體、即ち、ポリティアを描き出してゐる。斯くの如きものは、西紀前第五世紀を通じてボイオチアに實施せられた穩和なる寡頭政體(ὀλιγαρχία ἰσόνομος)、並びに西紀前四百十一年に於ける民主政の顚覆に際して現れた雅典の貴族政體に近いものである。後者は政治に參與し得る者を五千人に限定し、富者によつて指導せられ、中層階級によつて援護せらるゝ所のものである。此の四百十一年の民主政顚覆に際して顯著なる役割を演じたものは寡頭政治倶樂部であつた。而して是れ等の倶樂部が、ペロポンネソス戰役末期に至つて、自己を防護せんとする富裕階級の秘密結社と爲つたことは、吾人が他の機會に於いて一言せる所である。(前揭「希臘の社會不安」九三頁)。ツキュディデスは此の穩和なる寡頭政治を以つて雅典の有した最良のものであると做し、而してアリストテレースは之れに同じてゐる。斯くの如き彼れの政治的意見は又、マケドニア王室に於いて現存制度の擁護者を看出さんとして居つた雅典有產階級に對して好感を與ふるものでなければならなかつた。

然しながら、リュケイオンに於ける知識階級の團體は、若いアレクサンドロスの殆んど狂想的な世界改造に信を置くこと能はずして、全然相對立せる自治的なる希臘貿易都市と官僚政治的なる東洋王政の要素とを混和融合せんとする彼れの施政計畫を禮讃することが出來なかつた。アリストテレースはアレクサンドロスに寄せた書の斷篇中に於いて、希臘人に對しては主導者（ἡγεμών）として、夷狄に對しては、彼れ等の慣れてゐる絶對無限の君主（δεσπότης）として行動す可く、前者は之れを友人として、又同輩として、後者は之れを「動物若しくは植物」として取扱ふ可きことを說いてゐる。（Frag., 658 in Röbe.）。彼れは古き國家崇拜に代る可き何物をも其の「政治學」中に殘さなかつた。新たなる促進原理の構成は之れをツェノーンに待たなければならなかつた。ツェノーンは實にアレクサンドロスの大計畫に感悟せられて其の世界的國家の理想鄕を夢想したのである。而して希臘の市邦が旣に何等の政治的意義をも有せざるに至つた時、彼れ等の間に鮮明なる理想として現れた世界主義は終に羅馬人の間に移つて現實なる世界的帝國の理論と化したのである。

我國農業に於ける外的自然的條件

小池基之

目次

一、社會的生產力の發展に於ける外的自然的條件の意義
二、我國農業の自然的基礎
　A　土壤の自然的生產力
　B　氣溫—植物生育の自然的限界
　C　水の諸關係

一　社會的生產力の發展に於ける外的自然的條件の意義

人々は彼等の生活の社會的生產に於て、一定の、必然的な、彼等の意志から獨立した諸關係に、即ち彼等の物質的生產力の或る一定の發展段階に適應する諸々の生產關係に入り込み、そしてこれ等の生產關係の總和がその社會の經濟的構造を形造る(1)ものであるとすれば、一社會の特質は、當然、その「直接的生產過程」の諸特徵の分析のうちに求められるであらう。即ち生產關係はその基礎付けを生產諸力の諸要素の結合と活動の樣式（生產樣式）のう